

旬ぱん

情勢判断学会 東京本部
 会員向けニューズレター
 発行人 古川 彰久
 事務局 〒252-0321 神奈川県
 相模原市南区相模台 1-23-9
 Tel.&Fax.
 042-748-8240
<http://www.jouhan.com>
 E-mail: info@iki2life.com

6 月例会ご案内

6 月 8 日 木曜日 18:30 ~ 21:00

テーマ : 昭和と共に歩んだ国策研究会

場所 : 港区商工会館

参加費 : 1000 円

担当 : 篠原 昌人

一、シンクタンクという言葉はもう聞かれなくなったが、「国策研究会」こそ日本に於ける最初のシンクタンクと言ってよい。その源流は昭和 8 年にさかのぼる。官僚、貴族院議員、新聞記者を中心にして時事問題を話し合う、定期的な会合が都内（当時は東京市）で持たれた。最初は国策研究同志会と称した。このような会合は今なら珍しくないが、昭和の初めにあっては画期的なものだったと思われる。おそらく時流もあったのだろう。「国策」とか、「革新」という言葉が流行ったのは事実であった。同志会は昭和 12 年になって、国策研究会、として正式に発足する。様々な人間が加入し、毎月講師を呼んで話を聴くという今のスタイルが確立した。若手講師として記録に残っている人に、清水幾太郎がいる。戦後の論壇を引っ張った一人であるが、当時は三十代の東大助手であった。また会員の中に松永安左エ門（東邦電力社長）がいたのも面白い。研究会は、専門部会を作り、たとえば第一部会は外交問題、第二部会は社会問題、第三は何々という風に充実した構成であった。昭和 12 年というと近衛内閣が表れた年であり、国策研究会はこの内閣とは縁が深くなる。近衛を支えたグループとしては、「昭和研究会」が挙げられる。この両者は当時の代表的シンクタンクと言えようが、昭和研究会は近衛の私的アドバイザーという感が強い。同会を中心に活躍したのが、尾崎秀美であった。国策研究会は昭和 20 年 2 月まで続くが、昭和研究会の方は昭和 15 年に解散している。

一、国策研究会を長続きさせた根本は、矢次一夫という人物の存在である。国策＝矢次であり、事実上の創立者であった。確か大宅壮一であったか、昭和最大の怪物と称された。それほど的人物なのにまとまった伝記がない。ないところが怪物なのかも知れない。明治 32 年生まれで昭和 58 年に死んだ。矢次という人は二十代で、「労働事情調査所」なる一種のミニ研究所を作って労働問題のレポート誌を自ら編集

した。大正時代から次第に労働争議が多発し始め、その対策や解決にも一役かった。その名を高めたのは、野田醤油（現キッコーマン）の大争議をまとめたことであった。このためか、キッコーマンの茂木氏は代々国策の幹部会員である。大争議と言えば、八幡製鉄の溶鉱炉が消えたニュースがあった。この争議の立役者が浅原健三である。後に石原莞爾と親しくなり、陸軍を赤化する男とも言われた。矢次、浅原共に労働問題をバネに政界、軍人上層部と結びついた。このわけは、労働者側、使用者側双方の結節点に立っていたからであろう。上手に解決すれば両者から感謝され顔も広がるということだ。矢次はこうした才覚に長けており、そのうえ調査は的確で文章もものにした。自然と重宝がられるわけである。昭和 12 年に再発足すると、国策は陸軍省の囑託となり年 5000～6000 円の援助を受けることになる。これはひとえに矢次という人の魅力故であろう。陸軍省囑託矢次一夫とも言ってよい。こうしたことから次第に軍部の上層部ともつながりができる。東条英機とも酒を飲んだという（一説にこの男ほど料亭の酒を飲んだ人物はあるまいという、タダである）。日本が難しい時期に入っていくにつれて、国策の役割は増大してゆく。次の内閣は誰にするか、三国同盟に加入すべきかどうか、無論矢次一人で全て結論を出しているわけではないが、多くの場合複数の案を出して政府に選ばせた。この時代、多くの人が近衛に期待したが、矢次は逆に近衛を買っていないかった。これは肌合いかもしれないが、前記松永安左エ門の人物評も手厳しい。官を徹底的に嫌った松永に対し、矢次は、「勝手な男」と評している。国策は昭和 20 年 2 月一旦解散となるが、日本が独立を回復するとまた活動を始める。戦後の矢次を支えた人物の一人は岸信介であり。終生交遊は続いた。矢次という人は異相とも評されたくらい独特の容貌である。これも力の源泉という人もいる。また朝鮮人説を唱える関係者もおおり、これまた怪物性を物語っている。

一、現在本会は創立 80 年を超え、公益財団法人として月二回の講演会を行っている。多彩な人物が入り出した国策だが、城野宏氏も国策には顔を出された由で事務局員と食事をしたという。非常にユニークというのが事務局の感想だが更に確かめたい。

4月例会報告

4月13日 木曜日 18:30 ~ 21:00

テーマ : 万葉集紹介 (東歌・防人の歌)

場所 : 港区商工会館

担当 : 飯田 豊

私と万葉集の最初の関わりは、子供時代の小倉百人一首のかるた遊びでしたが、当時は、「万葉集」の言葉すら知りませんでした。その後授業で勉強しましたが、難解な歌程度の興味しかありませんでした。5年ほど前から、縁があり、仲間が集い各地の万葉歌碑を訪ね歩く会を作りました。

関東にある万葉歌碑の殆どは、東歌と防人の歌碑です。これは、大和の都人や大宰府の官吏の歌と異なり民衆の歌が多く、秀作かどうか別にして現代の人の心に響くものも多い。齋藤茂吉が「万葉秀歌(上下)」の中には、東歌・防人の歌は殆ど取り上げられていません。

4月例会時に万葉集の概要と東歌及び防人の歌を中心にお話をしました。口語訳を含め簡単にまとめご報告いたします。尚当日は風邪のため殆ど声も出ず、皆様にご迷惑をかけたこととお詫びいたします。

1) 万葉歌碑を巡る会の紹介

多摩地域(30市町村)における新しい生涯学習(楽習)の場として平成7年に発足しました。古典を読む会、絵画(水彩画、油絵、山水画)の会、ウォーキングの会等々を3ヶ月から10ヶ月勉強します。「万葉歌碑を巡る会」は、「万葉集を読む」2013年19月~翌年7月までの20回の講座でした。その講座終了後、万葉歌碑を巡る会を、会員10名で2014年10月にスタートさせました。

3年半を経過し、27回に亘り、関東1都4県50歌碑以上を訪ねました。そのいくつかを紹介いたします。

2) 万葉集とは

現存する最古の歌集で全20巻 4516首が収められています。万葉集の意味はいくつかの学説がありますが、次の2つが、有力です。万はよろず、沢山の意味です。「葉」は何か?①言葉・歌②時代(世・代)。学問的な決着はまだついていません。

編者は、大伴家持が深く関わったとされています。万葉集の最後の歌は、大伴家持の「新しき年の始めの初春の今日降る雪のいやけし吉事(よごと)」(新しい年の始めの初春、先駆けて今日のこの日に降る雪の、いよいよ積もりに積もれ、佳きことよ)で締めくくっています。

万葉の時代は、実質舒明天皇(629年即位)の治世から130年間と言われています。巻頭歌は、雄略天皇(舒明天皇より約150年前)の御製ですが、雄略天皇が詠んだものではないとなっています。その後聖徳太子夫人や妹も詠んでいますが、これも定かではありません。そのため実質舒明天皇からとな

っています。

当時は仮名もなく、表音式の万葉仮名と呼ばれるもので表記しました。まだ未だに読めていない文字があります。*6)参照

3) 万葉集の部立(ぶたて:歌の分類)

3種類の部立がある。

- ① 雑歌: 儀礼、行幸、旅、宴会等公的な場で作られた重要な歌。約1500首
 - ② 相聞歌: 男女の恋を歌う私的な歌。約1750首
 - ③ 挽歌: 人の死を悲しむ歌。約260首
- この部立とは別に、東歌(巻14)防人の歌(巻20)他があります。

4) 東歌

東歌は、東国(遠江・駿河・伊豆・相模・武蔵・上総・下総・常陸、信濃・上野・下野・陸奥)に伝わる約230首で全て短歌です。方言も入っており、泥臭さもありますが、男女の機微をうまく歌っている側面もあります。土地に伝わる伝承歌もあり、作者は全て未詳です。

東歌の例として、「真間(まま)の手児奈(てこな)」を紹介します。真間の手児奈(愛らしいおとめ)は、万葉集以前から有名で、都人の山部赤人や高橋虫麻呂も歌を残しています。下総の真間(現在の市川市真間)には、絶世の美女住んでおり、皆から慕われたが、気のいい彼女は誰にともし決まきれずに思い悩み入水しました。

真間の東歌の一つに「葛飾(かづしか)の真間の手児奈をまことかも われに寄すとふ真間の手児奈を」(口語訳: 葛飾の真間の手児奈、あの子を、本当かいな、世間の人がこの私に言い寄せているそう。あの真間の手児奈をさ)

5) 防人の歌

当時朝鮮半島からの脅威を守るために、兵役が課されました。律令制では21歳~60歳の男子は三年間の防人の軍役につく義務がありました。実態は、東海道、東山道地域の人に限られていました。その理由は、東国人が勇猛であるとの説と東国の勢力を封じるためとの説もある。

防人の総数は、約三千人、その大半は、筑紫地域、大宰府、壱岐、対馬に配置されました。帰りは自費(往きは、浪速の津から筑紫までは、官費)で帰郷しないものもいました。

防人が、故郷に残した家族(妻子、両親)を心配する歌や残された家族が心配している歌があります。84首収録されており出身地・名前が解っております。

防人の歌は次の二首を紹介します。歌碑は、川崎市金程万葉苑にあります。「家ろには 葦火(あしふ)炊けども 住みよけを 筑紫に到りて 恋しけもはも」(口語訳: 我が家では葦火を焚く貧しい暮らしだけれど、それでも住み心地はよいのに。筑紫に着いてから家が恋しく思われてならない

だろうな。)、その妻の歌は、
「草枕 旅の丸寝の 紐絶えば あが手と着 (つ)
ける これの針 (はる) 持し」(草を枕の旅の
ごる寝で着物の紐がちぎれたら、わたしの手だと思
って付けろ。この針を持って。)と夫婦の思いや
りが感じ取れます。

6) 筑波山に関する歌

常陸風土記には、「昔尊貴な祖神様が、大勢の
神々を訪問し、富士の神に宿を乞うたところ、断わ
られ、富士の神を呪った。次に筑波の神に宿を乞う
たところ、快く引き受け歓迎された。神の好意を飲
び祝福の歌を贈った。」とあります。「祖神様は筑波
山を愉しむ山、富士山を人を寄せ付けない山にしま
した。」

筑波山に関する歌は、25首あります。筑波
山は古代より歌垣(嬬歌:かがい)で有名です。歌
垣とは、男女が集い、飲食をし、歌謡をすることを
言います。高橋虫麻呂の歌はその歌垣の様子を歌っ
ています。

「筑波嶺に 登りて嬬(か)歌会(がひ)を 為
(す)る日に 作る歌一首并せて短歌

驚(わし)の住む 筑波の山の 裳羽服津(もはき
つ)の その津の上に 率(あども)ひて 娘子(を
とめ)壯士(をとこ)の 行き集ひ かがふかがひに
人妻に 我も交らむ 我が妻に 人も言問へ この山を
領く(うしはく)神の 昔より 禁(いさ)め
ぬ 行事(わざ)ぞ 今日のみは めぐしもな見そ
事もとがむな (口語訳省略)

反歌

男神に 雲立ち上り しぐれ降り 濡れ通るとも
我れ帰らめや(口語訳:男神の嶺に雲が湧き上ら
ってしぐれが降り、びしょ濡れになろうとも、楽しみ
半ばで帰ったりするものか。)

筑波山に関する東歌一首。「筑波嶺に 雪かも
降(ふ)らるいなをかも 愛(かな)しき子(こ)ろが
布(に)の乾(ほ)さるかも」(口語訳:筑波嶺に雪が
降っているのかな、いや違うのかな、いとしいあの
子が布を乾かしているのかな)

この歌を万葉仮名でかくと次の様になります。

「筑波祢尔 由伎可母布良留 伊奈乎可母 加奈
思吉兒呂我 尔努保佐流可母」地名以外は、全く意
味がない表音での表現になっています。

7) 富士山を望む歌一首

最後に子供時代に小倉百人一首で興味を持った
歌に触れます。百人一首の歌は、藤原定家が選出し
た新古今和歌集のもので、万葉集と少し異なります。
「山部宿祢赤人、富士の山を望む歌一首併せて短歌
天地(あめつち)の 分(わか)れし時ゆ 神(かむ)
さびて 高く貴(たふと)き 駿河(するが)なる
不尽(ふじ)の高嶺(たかね)を 天(あま)の原(は
ら) 降(ふ)り放(さ)け見れば 渡る日の 影(か
げ)も隠(かく)らひ 照る月の 光も見えず 白雲

(しらくも)も い行きはばかり 時じくそ 雪
は降りける 語り継(つ)ぎ 言ひ継ぎ行かむ
不尽の高嶺は (口語訳省略)

田子(たご)の浦(うら)ゆ うち出(い)でて見れ
ば 真白(ましろ)にそ 不尽(ふじ)の高嶺(たか
ね)に 雪は降りける(口語訳:田子の浦を打ち出
でてみると、おお、なんと、真っ白に富士の高嶺
に雪が降り積もっている)

都人の山部赤人が、今でいう地方役所に赴任し
てきたとき、田子の浦を経由して由比に入ろうと
したとき初めて見た富士山の感動を詠んだもの
です。山部赤人がどの地で詠んだのか、定説は
薩埵峠と言われています。この場所は、親不知子
不知として有名な、崖が非常に海岸線に近づいた
場所です。広重も東海道五十三次の由比の宿で薩
埵峠(さったとうげ)から富士山を画いています。
昨秋東海道線の興津駅から由比駅まで旧東海道
を約10Kmを歩きました。薩埵峠から眺めると、一
部駿河湾の上を通っている東名高速道、その左側
を国道1号線、その左が東海道線で正に崖に寄り
添っていました。

当日は曇天であり、残念ながら富士山は隠れてい
ました。日を改めてまた訪れたいと思います。

*興味ある方は、“ライブカメラ富士山ビュー”を
検索してください。

8) まとめ

万葉集の勉強と健康のためウォーキングを組
み合わせて活動を始めました。系統だった歌碑訪
問ではなく、季節性や利便性の行き当たりばった
りの順番でした。しかし数見て感じるのは、今で
も通じる男と女の感情(東歌)や離れて暮らす夫・
妻の思いやり(防人の歌)が、千五百年近く経っ
ていますが、同じ感ずる想いがありました。また
その地に行き、地勢は変わっているものも当時の
雰囲気を感じる場所もあり感慨深いものがあつ
た。この会もいずれは飛鳥の里への旅をと話あつ
ています。

当日は、30首程紹介しました。その議論の中
で、東歌や防人(地方下級役人)が、歌を詠めた
のだろう(万葉仮名)かとの疑問もでました。当
時は大化の改新により、地方豪族の管理(国司を
おき、役人の地方への派遣、税制の整備)や交通
網の整備(五海道、駅制度)により、都との情報
が早く伝わるのが影響していると考えられる。

<参考文献>

- 新版万葉集一〜四 伊藤 博訳注
- 改訂新版 万葉の旅 中 犬養孝著
- 万葉秀歌 上下 齋藤茂吉著
- 百分で名著 万葉集 佐々木幸綱著
- 関東の万葉歌碑 長島 喜平著
- 万葉集に生きる筑波山 宮本千代子著
- TAMA市民塾 講義録 講師 葛山由博

